

# ペシャワール会

中村医師のパキスタンでの医療活動を支援する会



ペシャワールのスラム地区で

水の少ないパキスタンでは一つの井戸を中心に多くの人が密集して住む。4～6畳程度の一室に5～7人の家族が住む。居間、食堂、寝室兼用である。しかし人々の表情は明るい。

御挨拶	中村哲	2
JOCSの組織と活動	奈良常五郎	3
貧しく病める人の友となって	隅谷三喜男	5
ペシャワール会趣意書および会則		6

# 御挨拶

中村 哲

このたび私は、JOC S（日本キリスト教海外医療協力会）よりパキスタンの北西辺境州の地にワーカーとして家族と共に派遣されることになりました。

パキスタン北西辺境州は、カシミール、アフガニスタンに隣接する乾燥した広大な山岳地帯ですが、救済対策を始めとする医療事情も、パキスタン国内でもまた最もたらくれた地域です。私は来年五月から、主にらい患者と山村部の住民のために長期間働くことになりました。



この地を訪れたのは、一九七八年福岡登高会のヒンズー・クツシュ遠征隊に加わったのが初めですが、その頃まで私はJOC Sなどの活動については良心の免罪符か、外国人のおせっかいくらいにしか思っておりませんでした。しかし、かの地の実情は、観念的な批評をはるかに超えて圧倒的なものがあり、以来私は何をなすべきかを自問し続けてきました。そして今回、JOC Sを通じて、北西辺境州の州都ベシヤワールのミツシオン病院から協力の要請があり、ささやかながらかの地の住民の健康のため働く機会を与えられました。これは私自身予想していなかったことですが、全く神の美しい御配慮というより他ありません。

われわれの行方は、大海の一滴の水をすくうようなものかも知れません。しかし、JOC Sのともし続けてきた日本人の良心の灯を、多くの心ある人々と共に絶やさぬよう微力を捧げたいと思っております。どうぞ私たちの会に御参加下さり、御協力いただければ幸いに存じます。



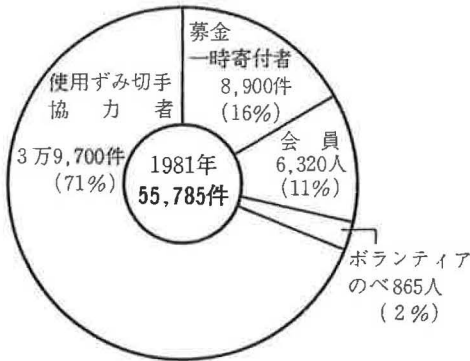
# JOCSSの組織と活動

奈良常五郎

## ● 会員組織の JOCSS

JOCSS (日本キリスト教海外医療協力会) は、主として東南アジアの保健医療にめぐまれていない国々に日本から医療従事者をおくり、協力相手の団体あるいは機関と協力して現地住民のため奉仕しようとする会員組織の民間団体であります。約二十年前、二四五名の有志によって結成されましたが、現在は六、三〇〇名の会員をもち、かなり広い範囲から支援をうけて活動を続けています。

JOCSSを支える人々 (1981)



海外へ派遣されて直接に医療協力に従事している者は現在十二名にすぎませんが、それらの海外ワーカー(派遣者)は常に背後にいる多数の会員や支援者を意識して現地の生活や活動を報告していますし、現地で当面する問題があれば一緒に考えてもらおう姿勢で働いています。会員たちもまた、厳しい状況の下で献身的に働いている海外ワーカーの、いわば分身となつて、自らは現地の医療協力活動に直接には参加できないでも、共にその重みを担い合う気持でいます。したがつて、会員であるということは、単に一定の会費を納入することだけではなく、親身になつて海外ワーカーの働らきを見つめ、JOCSSの運動全体に人格的に参与することを意味しています。この点が政府間協定によって行われる国の技術協力などと違う本会の特色の一つでありましょう。

## ● 理事会とその役割

会員は毎年定期に開催される総会で年度報告をうけ、事業計画、予算を決定し、二年ごとに総会で理事(定員二十名)、監事(定員一名)を選任します。理事のうち一名は会長となり、会を代表し会務を統率します。理事会は定期に会議をひらき、会の運営方針を決定し、事業の要項を定めます。内規によって理事のうちから数名の常任理事が互選され、そのうち一名が常務理事となつて会長を助け、理事会から委託された諸案件の処理や日常的な会務の運営に当たっています。会長をはじめ役員諸氏は責任感が強く非常に熱心に諸会議に出席することが本会の特色になつています。

会長(理事会)は、また諮問機関として評議員会を設けて会の重要な問題について意見を問ひ、また理事会の諸業務を分担して諸問題を詳細に審議してもらうために、フィールドあるいはプロジェクトごと

の委員会、将来の海外ワーカー育成委員会、研修生委員会、その他の委員会を設置しています。

東京および大阪に事務局が設置され、専従職員を置いて、理事会、委員会の業務に奉仕させています。が、なるべく事務管理費を少なくするため事務局はできるだけ小さくして、役員、委員、会員有志のボランティア奉仕を求めています。

## ● 事業活動の内容

本会の定款にさだめられている事業には、(1)医療従事者の海外派遣、(2)海外から医療従事者の研修のための招聘、(3)派遣される者、研修をうける者の訓練施設の設置、(4)その他この法人の目的を達成するために必要な事業があります。

(一)海外派遣については、現在は別記のとおりであります。これは我われの側の考えだけに基く一方的な派遣ではなく、協力会の名にふさわしく、主としてアジア諸国のキリスト教関係保健医療機関あるいは団体との間に結ばれる協定によって行われています。この協定は実際には相手側の要請に始まることもあり、本会の側の希望によることもあります。しかし、これらの協力プロジェクト設定に当つては、あくまで平等の立場で、パートナーとして協力する精神によつており、一方的な押付けを避けています。

JOCSSは時おり資金供与団体と誤解され、発展途上国から病院建設のための資金援助や医療機械、医薬品などの供与を要求されることがありますが、そのような物的援助だけの要請には応じていません。本会は医療従事者の派遣・招聘という人的交流を主としており、それによつて生まれる協力こそが長い眼でみてより生産的であり、協力相手の自立を助けることになると信じているのです。もちろん、本会の海外ワーカーの医療協力活動に必要な費用資材で、

受入れ側の予算で購えない場合は、本会から供与することがあります。しかし、あくまで人間による協力に重点を置いており、そのない物的援助は一時的には役立つかも知れないが、結局は依頼心を起させるだけであり、かえって自助の努力をさまたげる結果になることの多いのを知っているからです。

また、協力プロジェクト設定に当たっては、アジア諸国のうちでもLLDC (Least Less Developed Countries) と呼ばれる最も開発がおくれており、最も貧しく、見棄てられている地域の住民を主たる活動対象としていることも本会の特色です。

J O C S 海外派遣ワーカーは、二年、三年を一期とする長期派遣を主としており、数期を継続するワーカーもおります。協力プロジェクトの内容により専門を異にするワーカーを派遣していますが、医師、看護婦、保健婦、看護教師、小児栄養専門家、特殊教育教員など次第に幅ひろくなつて来ています。特別なプロジェクトに協力するため、要請に適した専門家を短期派遣することもあります。本会の海外ワーカーは僻地の困難な生活に堪え、語学能力があり、専門分野の知識技術にも優れ、謙虚で協力精神に富み、何よりも信服的に訓練されている人が選ばれていますが、J O C S 海外派遣ワーカーは何れも得難い人物であることを誇りにしています。

(二) 研修援助の事業は本会の最初の事業でした。日本へ招聘して研修してもらうこともありますが、日本の医療システムや施設の下での研修がアジアの他の国々の現地事情に適合しないことがあり、たとえばネパールからインドへ、バングラデシュからフィリピンへなど適合した訓練施設のある場所へ送つての研修援助も行われています。

本会と歴史的に関係の深い台湾や韓国のキリスト

教関係医療従事者の交流は別の形で長い間続けられています。その関係から要請をうけて研修の機会を与える特別な研修生もあります。この事業の本会としての意味は、本会の海外ワーカーのパートナーを育成するところにあるので、本会がワーカーを派遣している協力相手の事業に従事している医療従事者の研修援助を優先しています。

(三) 本会のワーカーの海外赴任前訓練や受入れ研修生の研修のための施設については、本会には現在専有のものはありません。必要に応じて大学や研究所、あるいは他の研修センターに研修を委託しています。最近、名古屋に「アジア保健研修所」ができたので姉妹団体として深く協力しています。

#### ● J O C S の国内活動

本会は海外活動の場をもっている団体ですが、その基盤を国内においている以上、国内活動にも力を入れざるを得ません。また、単に固定的な事業団体に止まることに満足せず、本会の活動を生み出す精神を会員の間に深めつつ、それを周辺に普及する努力をしています。本会は、本質的に始めから、実践を伴う一つの精神運動として常に生命力を失うものであつてはならないと考えているわけです。

『みんなで生きる』というのが本会刊行の月刊誌の標題ですが、この地球上何処でどのように生きていくにしても、人間は人間であり、同じように人間として生きる権利をもっています。それを互いに認め合い、兄弟姉妹として助け合い、平和的に共存を計ることはすべての人の念願であります。本会の役員、帰国している海外ワーカーなどは努めて全国各地を訪ね、映画、スライドなどを用いての講演会、話し合いの集会などの開催に努めています。必要なら広報活動も行っています。

使用済み切手集め運動なども、できるだけ広い範囲に、誰でも出来る仕方では本会の運動に参加してもらう一つの方法です。

#### ● J O C S 精神の普及

本会は「日本キリスト教海外医療協力会」と称しているように、そのすべての活動を聖書に示されたイエス・キリストの救いにあずかる信仰にもとづいて行っていることは申すまでもありません。それを明確にした上で、一般の参加を求めており、また人種、宗教の差別なくすべての人々に奉仕の手を伸べています。

また、本会の『基本方針』にも「医療を伝道の具に供せず、信徒獲得の手段ともしない」といつており、医療協力をキリスト教宣教の手段とはしていません。わたしたちは、医療行為そのものの中に常に神による救いを求めつつ全身全霊をうちこんでいるので、保健医療行為あるいは活動における神への全き信頼が自然に福音の香りを放つものと信じています。確固とした信念に立ち、しかも常に己れを低くして、キリスト者の陥り易い孤高と独善からのがれ、すべての人々の自由と独立を尊重し、その下僕として仕えることが私たちの生き方です。

ゆらい、宣教は神のみ業であり、教会の自己拡張を越えた大きな営みです。私たちの企てや業は常に神のきびしい裁きのもとにあることを知らなければなりません。私たちはただ与えられたすべての力を捧げ誠実をつくして、土の器の懸命な努力が神のみ業のために用いられることを祈るのみです。

J O C S の活動も、その海外ワーカーの働らきも、そのような意味において神と人とのよこばれるものであることを祈っております。

(J O C S 事務局総理事)

# 貧しく病める人の

## 友となつて

隅谷三喜男

今(一九八二年五月)日本キリスト教海外医療協力会(JOCS)は、十二名の医師、保健婦、看護婦、栄養士、障害者教育専門家の人たちを、アジアの国に送り出しています。これを国別にいうと、ネパールに三人、バングラデシュに四人(うち一名国内研修中)、インドネシア二人、タイ一人、台湾二人となつています。

その中には病院で働いている人たちもいます。医療の技術水準の点で、アジアの国々は、まだまだ日本の医療関係者の協力を必要としている、といつてよいでしょう。しかし、近年は、アジアの人たちの中で、欧米で医学教育を受けた人もふえてきています。そのうえナショナリズムの影響も強くなり、外国人がアジアの国々で大病院を経営したり、そこで医療活動をしたりすることを、歓迎しなくなつてきました。しかし、地域保健にまではまだまだ手が届きません。近代的医療の恩恵に浴しうる人は、ごく限られています。病人は人の背に背負われて、山を越え谷を渡つて四日も五日もかからなければ病院にたどりつけけない、というような事情も稀ではありません。

そこで現在、JOCSの多くのワーカー(派遣者)たちは、山の中、村の中の小さな診療所などを主な働き場としています。水道やガスはおろか、電気さえないアジアの農山村が、働きの場です。こういう

土地に入りこんで生活すると、かならずといつてよいほど赤痢とかチフスとかにやられます。しかも、医療の施設も、看護してくれる人も不十分な状況の中です。送り出している私たちは、遠くからハラハラし、神の支えを祈るのみであります。先輩のワーカーは、それを通過儀礼のように見えています。一人前のワーカーになるために経なければならぬ試練だ、というわけです。

このような危険を冒して東南アジアの辺鄙な土地に出かけることについて、日本国内でも批判がないわけではありません。たとえば、日本にもまだ無医地区はいくらかある。そこが我々の働き場ではないか、というわけです。しかし、日本では車で一時間もいけば、たいいてい病院や医院があります。キリストはこういう譬え話をされました。

「あなたがたのうちに、百匹の羊を持つている者がいたとする。その一匹がいなくなつたら、九十九匹を野原に残しておいて、いなくなつた一匹を見つけるまでは捜し歩かないであろうか。そして見つけたら、喜んでそれを自分の肩に乗せ、家に帰つてきて友人や隣り人を呼び集め、『わたしと一緒に喜んで下さい。いなくなつた羊を見つけたから』と言つて下さい。」(ルカ十五章四一―四六節)

JOCSの志すところもそこにある、といわなければなりません。九十九匹のほうは野原に残しておいても、草を食んでいるでしょう。しかしそのようなよい条件にない人々のことを、私たちは考えなければなりません。

JOCSはこのような精神に立つた、全くのボランティア・ムーブメントです。政府や特定の団体から一円の援助も受けていません。世間には、よい事をしようとするのだから、援助しようとする団体が

あるなら、多少汚いお金でも貰つたほうがよいのではないか、という意見もあります。そして、きれいなお金というものがあつかうか、たしかに一つの問題です。しかし、私たちが貧しくて医療も十分受けられないアジアの隣人たちに愛の手を差し伸べ、共に生きていこうとする時、私たちはできるかぎり誠意のこもつたお金でその奉仕をしたいと願つています。それが困難な状況の中で働いているワーカーたちの、一つの心の支えともなつていっているのです。私たちは自分たちの正しさを誇ろうなどとは思つていませんが、アジアの人たちとの心のきずなを大切にしていきたい、と望んでいます。

日本は第二次大戦後、とくに一九六〇年代以降、急速な経済成長のおかげで、大変豊かな国となりました。今日、日本のGNPは全世界の二パーセントを占めています。東南アジアの国々が全部集つても、太刀打ちできないほどの経済大国です。経済援助もある程度しています。そのような中で、JOCSの働きは、とくに経済的にみれば、小さなものです。しかし、JOCSははつきりした一つの考え方をもちています。

それは、JOCSは物や金を通してアジアの国々を援助するのではなく、人を送り、交わりを通してアジアの人々の友となつていこう、としていことです。その人というのは、いうまでもなく広い意味での医療関係者です。健康で生活できることは、すべての人の願うところです。この基本的な問題を通してアジアの人々の友となつていくことを志しています。しかしそれは、多くの方々への支えと祈りがなければできないことです。

皆さんの暖い御支援を願うものであります。

(JOCS会長・東大名誉教授)

## ●ペシャワール会趣意書●

みなさま、御健勝でお励みのことと存じます。

さてこの度、JOCSS（日本キリスト教海外医療協力会）から、当地福岡の中村哲医師（三十六才・九大医学部出身、香住ヶ丘バプテスト教会会員）をパキスタンの地に送り出すことになりました。

JOCSSについては、かつてネパールの岩村昇先生の活動で御存知の方もあると存じますが、この二十一年間、東南アジアを中心に「草の根の人々」をめざして、地道な活動が続けてまいりました。そして今回、パキスタンの辺境にあるペシャワール・ミッシヨン病院の切望に応じて医療協力を決定し、中村医師を派遣することになりました。

衆知のように、いわゆる「南北の隔差」とよばれるものは、われわれの想像を絶するものがあり、ネパール、バングラデッシュとならんでパキスタンもその例外ではありません。この豊かな日本の生活を省みるとき、胸の痛む思いを押えることはできません。

われわれの力は、数億の飢餓人口を前にして余りに小さなものですが、今回の中村医師派遣を機に、ともしれば忘れがちなこのアジアの同胞の苦難に想いをいたし、以て「一隈を照らす」良心の輪が当地で拡がってゆくことを心から願ってやみません。

中村哲医師は、一九七三年（昭和四十八年）九大医学

部を卒業後、専門の神経病学を中心に広く内科医として臨床にたずさわってまいりました。一九七八年、福岡登高会のヒンズークツシュ遠征隊に参加して改めてかの地の実情を知るに及び、ひそかに思いをあたためてきたことでもあります。以後麻酔科を初めプライマリ・ケアの研究をつんで今日に至り、今後ハンセン氏病、結核、熱帯医学の研究の後、一九八四年五月、正式に家族と共に赴任する予定であります。

彼の赴く北西辺境州は、アフガニスタンと接する広大な山岳地帯で、パキスタンの中でもさらに恵まれない地域であります。彼は長期に亘って、かの地でのりのこされた住民のために、ハンセン氏病を中心とする診療にあたる予定であります。

われわれもまた、国内にあつて、彼を支援することを通して、かのアジアの同胞の苦難に想いをいたし、微力を捧げたいと思います。中村医師はいわばわれわれの良心の分身・代弁者でありますので、大方の御協力と御支持を賜りたいと存じます。

どうぞこの趣旨に御賛同・御参加いただきますならば幸いに存じます。

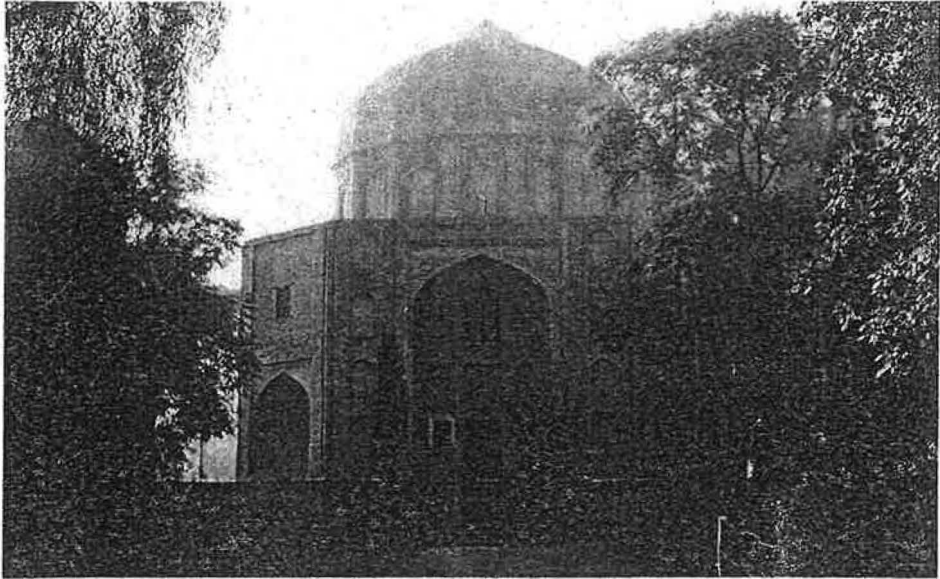
一九八三年五月二十二日

問田 直幹（中村学園大学学長）

以下 発起人一同

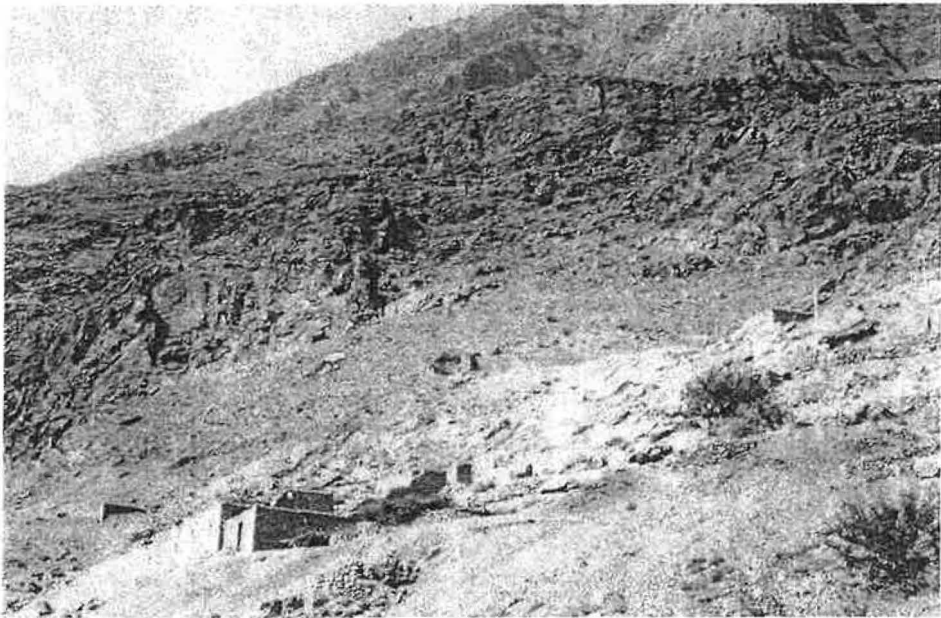






ペシャワール・キリスト教病院の礼拝堂

この病院は1890年に設立された。市内のスラムの住民に対しても活発に診療活動を行なっている。山間部の無医地区に対する医療奉仕も精力的に行なわれている。院長はドクター・ウジャガー。



カイバル峠

北西辺境州はおおむね荒寥たる岩石砂漠よりなる。

---

ペシャワール会事務局

福岡市中央区大名1-12-8 (〒810)  
福岡Y M C A内 電話(092)781-7410  
郵便振替口座 福岡9-6559